

# プラごみに対する大学生の意識および行動変容の要因分析

濱 源太・森野 真理

## Analysis of University Students' Consciousness and Behavior toward Solving the Plastic Waste Problem

Genta HAMA, Mari MORINO

### Abstract

Marine pollution caused by plastics is currently a serious problem. Efforts at the individual level are needed to curb plastic emissions, but it has been pointed out that there is a gap between environmental consciousness and behavior. This study conducted a questionnaire survey of 209 university students (collection rate 82%) with the aim of identifying factors effective in raising consciousness and changing behavior toward solving the plastic waste problem. The results showed a strong positive correlation ( $r = 0.76$ ) between consciousness and behavior, although there is a gap. Assuming that consciousness and behavior change are different stages, we analyzed discriminatory factors among groups with different levels of consciousness and among groups with different levels of behavior. The results revealed that the inhibiting factor for raising consciousness is the "hassle of sorting", that the level of consciousness is influenced by childhood family habits and people close to them, and that a good image of environmental behavior leads to higher consciousness. In addition, it was found that when the consciousness is already high, it is their knowledge and understanding that determines their environmental behavior. The study also suggested that charging for plastic bags is effective in promoting behavior change.

**Key words** : marine plastic pollution, plastic waste,  
 gap between environmental consciousness and behaviors

キーワード : プラスチック海洋汚染, プラごみ, 意識と行動の乖離

## 1. はじめに

現在, プラスチック海洋汚染が, 世界的に問題視されている。環境中に排出されたプラスチックは, 自

然に分解されにくい性質のため, 河川を経て海洋に至ったのち, 漂流と漂着を繰り返す。その過程で, 紫外線による劣化や物理的な刺激で破碎されると, 直径 5 mm 以下のマイクロプラスチックとなる (磯辺,

2018)。海洋中のプラスチックを海洋生物が摂食すると、生体への物理的な障害に加え、プラスチック由来の化学物質や、環境中で吸着した汚染物質による毒性の影響が指摘されている。特にマイクロプラスチックは、小型の動物にも摂食・誤飲されるため、食物連鎖を介した生態系全体への影響が懸念されている（山下ほか、2016）。なお、本論では、回収の有無を問わず、使用済みのプラスチックごみを、以下、「プラごみ」と称す。

日本における廃プラスチックの排出量は、生産量の急増に伴い、1980年から2000年にかけて3倍に増加したが、2015年ごろから微減し、2021年時は824万tとなっている（プラスチック循環利用協会、2022）。回収されたプラごみの有効利用率は上昇しているが（2021年時87%）、有効利用の内訳は、焼却で熱回収するサーマルリサイクルが59%を占め、素材として再利用するマテリアルリサイクルは21%に過ぎない（プラスチック循環利用協会、2022）。つまり、適切に回収されたとしても大半は焼却され、再利用率は低い。また、回収された廃プラスチックのうち、16%（2021年時）は海外に輸出されているが（プラスチック循環利用協会、2022）、最大の輸出先であった中国が、2018年より受け入れを中止し、東南アジア諸国も輸入禁止が続いているため、国内での資源管理が求められている。

海洋汚染源となるのが、適切に回収されず環境中に排出されたプラごみであり、大塚ほか（2021）によると、日本の陸域から海洋に排出されるプラスチックの総量は、年間約1,310万t（中央値）と推計されている。日本の沿岸に漂着した人工物のうち、プラごみは、重量比で35%、容積比で56%を占め、プラごみの4分の1は、容器包装類（ペットボトル、弁当箱・トレー等食品容器、ポリ袋・菓子袋等の食品包装材）である（環境省、2017年：全国沿岸10地点、2015年～2017年平均）。これらの漂着・漂流プラが劣化し、破碎されてマイクロプラスチック化すると、回収は困難となる。したがって、海洋汚染源となるプラごみを抑制するには、プラ

ごみの分別回収や再利用にとどまらず、使用総量の削減（リデュース）が重要である。特に、日常生活で利用されるプラスチック製品や容器包装類については、消費者の個人レベルの取り組みが不可欠である。

全国の18歳以上を対象に行われた世論調査（内閣府、2019）によると、プラごみ問題に対する一般市民の関心は非常に高く（関心あり89%）、問題解決のために、レジ袋を受け取らない、ポイ捨てや不法投棄はしない、ごみを正しく分別するといった取り組みについても、5割以上の回答者が、今後取り組みたいとしている（複数回答）。しかし、プラごみにかかわらず、環境問題への意識と行動には乖離があることが指摘されている。土井（2011）のレビューでは、環境問題に対する意識と行動の乖離は、義務教育課程の児童、大学生、社会人まで広くみられ、総じて、意識は高いが行動に結びついておらず、実際の生活・消費行動では利便性が優先される実態例が示されている。また、環境配慮行動を規定する要因として、情報、身近な他者の影響、環境規範意識、をあげている。陳（2022）は、都市在住の20代から60代を対象とした調査から、意識と行動に乖離はあるものの、整合性があることを見出した。また、行動実施の知識と方法の欠如、情報不足、行動の有効性の感覚をもてないことが、行動の重要な阻害要因であり、日本で環境配慮行動に至らない傾向があるのは、若年層、一人暮らしの世帯であると指摘している。これらの先行研究では、意識と行動の乖離を縮めることに焦点が当てられているが、陳（2022）が示したように、意識と行動に整合性があるのであれば、行動の変容だけでなく、意識自体の向上もまた重要なステップである。そこで、本研究では、一人暮らしの多い20代前後の大学生を対象とし、プラごみに対する意識の向上と行動の変容に有効な要因を明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

### (1) 調査方法

プラスチックに対する意識の向上と行動の変容にかかわ

る要因を明らかにするため、直接配布による調査票調査を行った。調査対象は、吉備国際大学農学部（兵庫県南あわじ市所在）の地域創成農学科および醸造学科に在籍する学部生（2021年時全学年計209名）とした。

表1 質問項目一覧

大問A群：プラスチックに対する意識	
カテゴリー	質問項目：（ ）内は質問の詳細
社会参加 (a1~a2)	a1:イベントへの参加 (プラスチックを減らすイベント等に参加してみたい) a2:講演の視聴 (プラスチック問題についての講演があれば聴いてみたい)
リデュース (a3~a8)	a3:ペットボトル飲料不要 (ペットボトル飲料は買いたくない) a4:マイボトル持参 (プラスチックを減らすためにマイボトルを使いたい) a5:レジ袋不要 (レジ袋をもらいたくない) a6:マイバッグ持参 (プラスチックを減らすためにマイバッグを使いたい) a7:カトラリー不要 (プラスチックスプーン・フォーク・ストローをもらいたくない) a8:マイ箸持参 (プラスチックを減らすためにマイ箸を使いたい)
リユース (a9~a10)	a9:詰め替え商品利用 (洗剤やシャンプーなどは詰め替え商品を買いたい) a10:レジ袋の再利用 (レジ袋は再利用したい)
モラル(a11)	a11:ポイ捨てなし (ごみはポイ捨てしたくない)
リサイクル (a12~a13)	a12:プラスチック分別 (プラスチックは分別したほうがよい) a13:ペットボトル分別 (ペットボトルは分別したほうがよい)
代替品 (a14)	a14:プラスチック代替品の選択 (代替品があればプラスチックを使っていない商品を選びたい)
大問B群：プラスチックに対する行動	
社会参加 (b1~b2)	b1:イベントへの参加 (プラスチックを回収するイベント等に参加したことがある) b2:講演の視聴 (プラスチック問題についての講演を視聴したことがある)
リデュース (b3~b8)	b3:ペットボトル飲料不要 (ペットボトル飲料を買わない) b4:マイボトル持参 (マイボトルを使う) b5:レジ袋不要 (レジ袋をもらわない) b6:マイバッグ持参 (マイバッグを使う) b7:カトラリー不要 (プラスチックスプーン・フォーク・ストローをもらわない) b8:マイ箸持参 (マイ箸を使う)
リユース (b9~b10)	b9:詰め替え商品利用 (洗剤やシャンプーなどは詰め替え商品を買う) b10:レジ袋の再利用 (レジ袋を再利用する)
モラル (b11)	b11:ポイ捨てなし (ごみのポイ捨てをしない)
リサイクル (b12~b13)	b12:プラスチック分別 (プラスチックを分別して捨てる) b13:ペットボトル分別 (ペットボトルごみを分別して捨てる)
代替品 (b14)	b14:プラスチック代替品の選択 (代替品があれば、プラスチックを使っていない商品を選ぶ)
大問C群：子供のころの習慣・教育・経験・プラスチックの知識	
習慣 (c1~c3)	c1:家庭でのごみの分別 (子供のころ、家庭ではごみの分別をしていた) c2:マイボトル習慣 (子供のころ、出かけるときにはマイボトルを持っていく習慣があった) c3:ポイ捨てしない習慣 (子供のころ、ごみのポイ捨てをしたことはあまりない)
教育 (c4~c6)	c4:義務教育・プラスチック問題 (義務教育で、プラスチック問題について学んだことがある) c5:義務教育・3R (義務教育で、3Rについて学んだことがある) c6:身近な人のプラスチックの話 (身近な人から、プラスチック問題について話を聞いたことがある)
経験 (c7)	c7:プラスチックの目撃 (海岸や川で、プラスチックが散乱している場所をみたことがある)
知識 (c8~c12)	c8:プラスチックのマイクロプラスチック化 (環境に排出されたプラスチックがマイクロプラスチック化することを知っていた) c9:海洋生物への影響 (環境に排出されたプラスチックが海洋生物に悪影響を与えていることを知っていた) c10:マイクロプラスチックを排出する商品 (マイクロプラスチックは、スクラブ入り化粧品・フリース衣類・スポンジなどからも排出されることを知っていた) c11:人体への影響 (マイクロプラスチックは人体に悪影響をもたらす可能性があることを知っていた) c12:中国のプラスチック受け入れ中止 (日本は2017年までプラスチックを中国に輸出していたが、2018年以降中国が受け入れ中止としたことを知っていた)
大問D群：環境配慮行動へのイメージ・価格の制約・プラスチックの商品力・分別の手間	
分別の手間 (d1~d2)	d1:プラスチック分別の面倒さ (プラスチックの分別は面倒である) d2:ペットボトル分別の面倒さ (ペットボトルの分別は面倒である)
価格の制約 (d3~d4)	d3:レジ袋代もったいない (レジ袋代を払うのはもったいない) d4:代替品価格の高さ (プラスチックの代替品を使った商品は価格が高い)
商品力 (d5~d7)	d5:プラスチックの使いやすさ (プラスチック製の商品は代替品より使いやすい) d6:プラスチックの種類豊富さ (プラスチック製の商品は代替品より種類が豊富である) d7:プラスチックのデザインの良さ (プラスチック製の商品は代替品よりデザインが良い)
イメージ (d8~d9)	d8:環境配慮企業のイメージの良さ (環境に配慮している企業には良いイメージがある) d9:環境配慮行動をする人のイメージの良さ (環境に配慮した行動をしている人には良いイメージがある)

調査票調査の事前に、当学部学生8名(3,4年生)で、プラごみに対する意識および行動に関与すると考えられる要因について議論し、調査票の設計に反映させた。調査票は、属性(性別・居住形態・学科・学年・出身都道府県)および大問4群(A群~D群)で構成し、各群の質問項目を、表1に示すカテゴリーに分類した。大問A群(a1~a14:6カテゴリー)は『プラごみに対する意識』、大問B群(b1~b14:6カテゴリー)は『プラごみに対する行動』、意識や行動に関与すると考えられる要因として、大問C群(c1~c12:4カテゴリー)『子供のころの習慣・教育・経験・プラごみの知識』、および大問D群(d1~d9:4カテゴリー)『環境配慮行動へのイメージ・価格の制約・プラ製の商品力・分別の手間』とした。回答形式は、属性(性別・居住形態・学科・学年)は単数回答法、出身都道府県(留学生は出身国)は自由回答法、大問A群および大問B群は、4段階の順位回答法、大問C群および大問D群は、「はい」または「いいえ」で選択する単数回答法とした。調査票は、2021年11月2日から11月4日に直接配布し、2021年11月9日から11月19日に回収した。

(2) 分析方法

まず、単純集計で、プラごみに対する意識と行動の傾向を把握した。次に、プラごみに対する意識と行動の順位回答を数量化し(表2)、回答者(N=174)の意識(a1~a14)の平均値および行動(b1~b14)の平均値を求め、全体の相関を分析した。また、意識

表2 プラごみに対する意識・行動の順位回答数量化

質問群	2点	1点	-1点	-2点
プラごみに対する意識 (大問A群 :a1~a14)	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
プラごみに対する行動 (大問B群 :b1~b14)	よくある	ときどきある	あまりない	ほとんどない

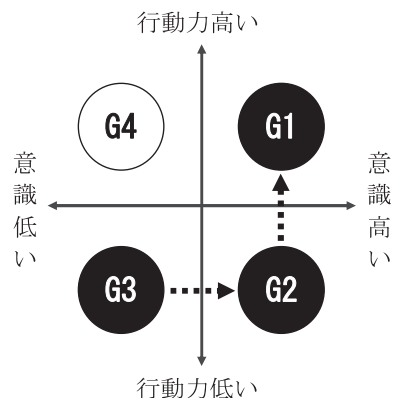


図1 2軸(プラごみに対する意識および行動)による回答者の分類(G1群~G4群)

と行動の平均値を2軸とした散布図を用い、回答者を図1に示す4グループに分類した(第1象限から第4象限の順にそれぞれG1群からG4群とする)。なお、意識または行動の平均値が0の場合は、いずれも低いグループに分類した。この分類により、G1群は「意識が高く行動力も高い」グループ、G2群は「意識は高いが行動力が低い」グループ、G3群は「意識が低く行動力も低い」グループ、G4群は「意識は低いが行動力は高い」グループとみなし、グループ間の判別要因を2段階で分析した。まず、意識の高さの違いをもたらす要因を探索するために、G2群とG3群を対象に、大問C群およびD群の回答について判別要因探索クロス集計を行った。次に、行動力の高さの違いをもたらす要因を探索するために、G1群とG2群を対象に、大問C群およびD群の回答について判別要因探索クロス集計を行った。なお、意識が低く行動力が高いG4群については、今回の分析対象から除いた。

3. 結果

(1) 回収率および回答者の属性

調査票の回収率は83%(209名中174名)であった。回答者の属性について、性別は、男性78%、女性21%、その他1%、居住形態は、一人暮らし86%、家族と同居9%、家族以外と同居5%、学科は、地域創

成農学科65%，醸造学科35%，学年は、1年生21%，2年生34%，3年生28%，4年生17%，出身都道府県（留学生は出身国）は、近畿地方43%，中国地方23%，四国地方16%，その他18%であった。

(2) 単純集計結果

① プラごみに対する意識（大問A群）

図2に示すように、プラごみに対する意識として、リユース、モラル、およびリサイクルの項目は、a9～a13すべての項目で、「そう思う」および「ややそう思う」

の回答が8割を超えていた。一方、リデュースの項目については、a6（マイバッグ持参）をのぞき、「そう思う」および「ややそう思う」の回答は5割を下まわり、プラごみを減らしたいとする意識は全体に低かった。社会参加や代替品の項目についても、「そう思う」および「ややそう思う」の回答は、5割前後であった。

② プラごみに対する行動（大問B群）

図3に示すように、プラごみに対する行動として、リユース、モラル、およびリサイクルの項目は、「よくある」および「ときどきある」の回答が7割から9

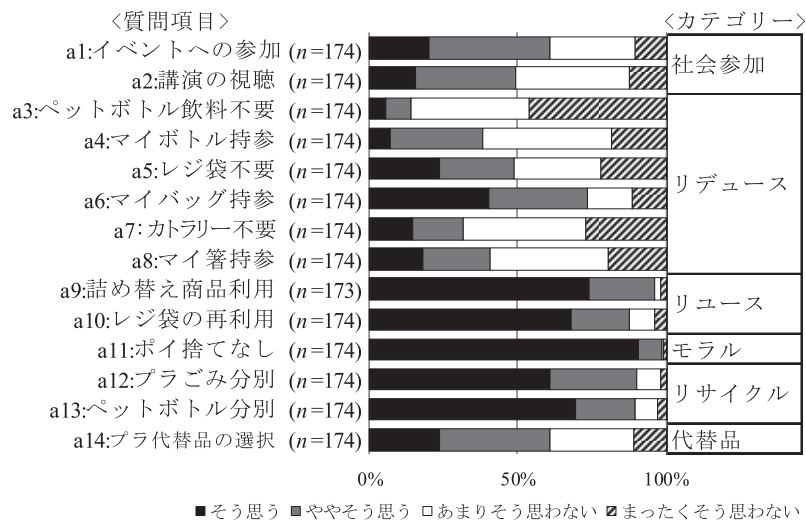


図2 プラごみに対する意識（大問A群）

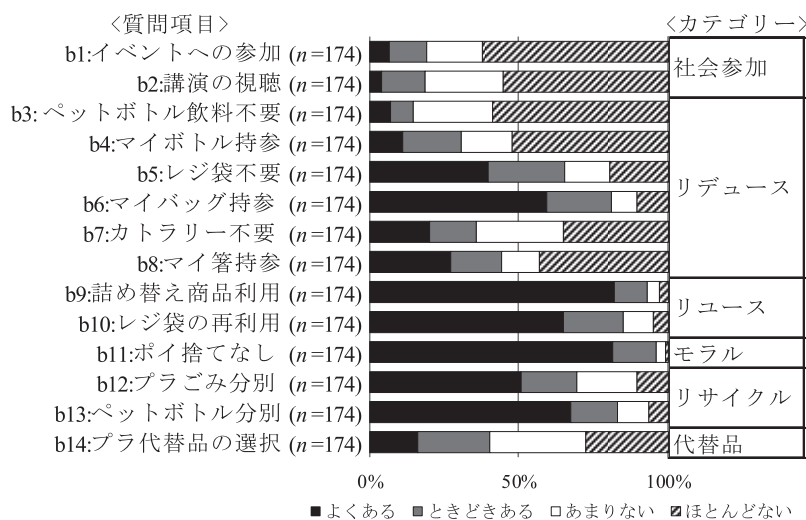


図3 プラごみに対する行動（大問B群）

割を占めた。一方、リデュースの項目については、「b5: レジ袋不要」および「b6:マイバッグ持参」を除き、「よくある」および「ときどきある」の回答は5割を下まわった。社会参加や代替品の項目については、「よくある」および「ときどきある」の回答は、2~4割であった。

### (3) 意識と行動の相関

プラごみに対する意識と行動の順位回答を表2に示す点数で数量化し、各回答者について、意識(a1~a14)の平均値および行動(b1~b14)の平均値を求めた。図4は、意識の平均値をX軸、行動の平均値をY軸とし、各回答者の座標をプロットした散布図である。意識と行動の相関係数 $r$ は0.76であり、強い正の相関がみられた。

次に、図4の散布図を用いて、回答者を4グループに分類した結果、各グループの回答者数は、「意識が高く行動力も高い」グループ(G1群:  $n_1=98$ )、「意識は高いが行動力が低い」グループ(G2群:  $n_2=36$ )「意識が低く行動力も低い」グループ(G3群:  $n_3=37$ )、「意識は低いが行動力は高い」グループ(G4群:  $n_4=3$ )となった。

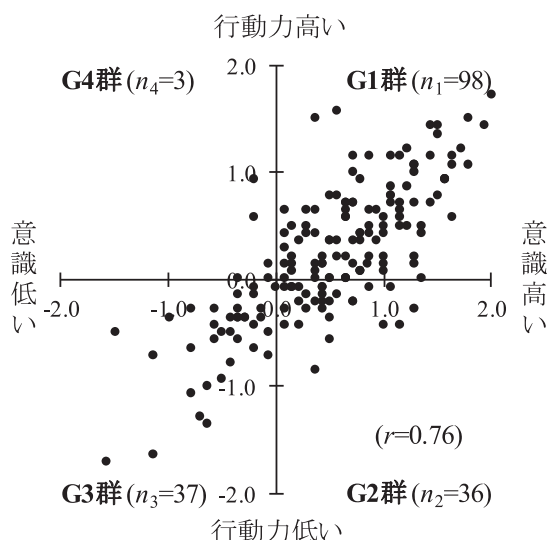


図4 プラごみに対する意識および行動の平均値の分布と回答者のグループ化 (G1群~G4群)

### (4) 意識と行動に乖離のある項目

意識と行動の平均値を項目別に比較検定 (Wilcoxon t検定) した結果、9項目で、意識と行動に有意に乖離がみられた。有意差があった項目は、「a1-b1: イベントへの参加」, 「a2-b2: 講演の視聴」, 「a4-b4: マイボトル持参」, 「a5-b5: レジ袋不要」, 「a6-b6: マイバッグ持参」, 「a11-b11: ポイ捨てなし」, 「a12-b12: プラごみ分別」, 「a13-b13: ペットボトル分別」, 「a14-b14: プラ代替品の選択」であった (図5)。これら9項目のうち、「a5-b5: レジ袋不要」, 「a6-b6: マイバッグ持参」は、意識より行動が高く、それら以外は、意識より行動が低かった。

### (5) 判別要因

意識の高さの違い、および行動力の違いをもたらす要因を探るために、グループ間の判別要因を分析した。分析に供した項目は、大問C群 (子供のころの習慣・教育・経験・プラごみの知識に関する12項目)、および大問D群 (環境配慮行動へのイメージ・価格の制約・

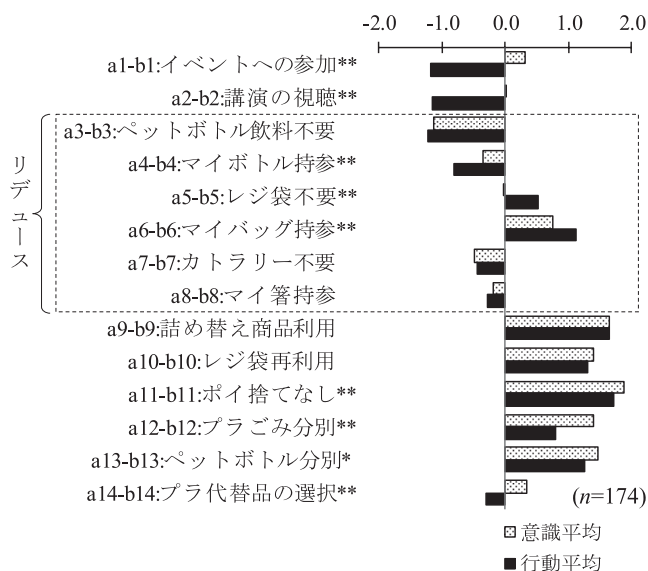


図5 項目別に見たプラごみに対する意識および行動の平均値の比較

注1) 各項目右肩の\*は、意識と行動の平均値における有意差検定危険率 (\*;  $p<0.05$ , \*\* $<0.01$ )

注2) 図中破線枠内は、リデュースのカテゴリーに属する項目を示す。

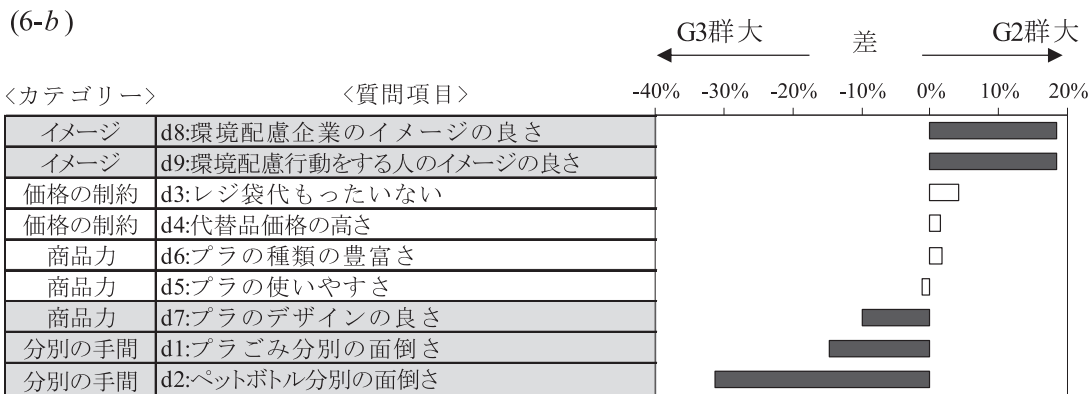
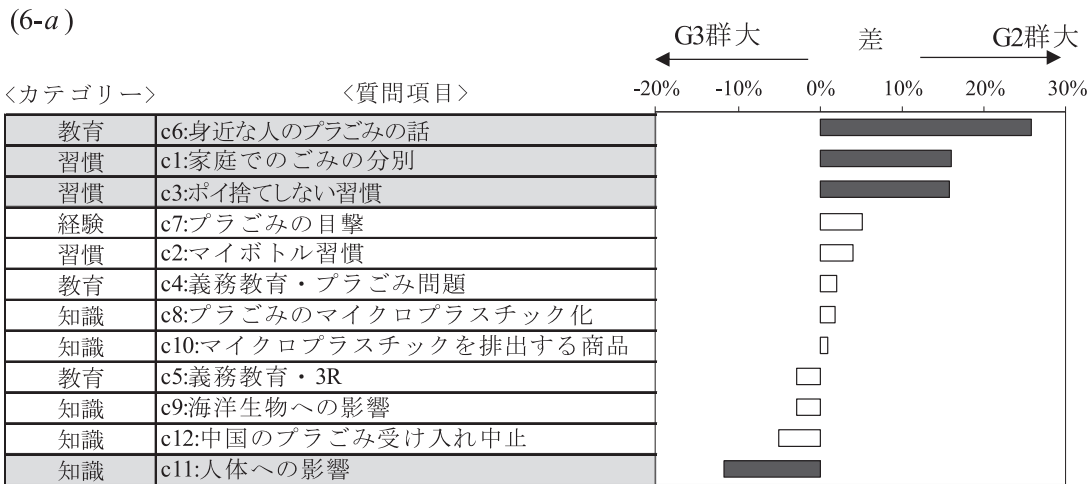


図6 G2群とG3群の判別要因 (6-a : 大問C群, 6-b : 大問D群)

注1) グレーの横棒は、グループ間の差が10%以上の項目

プラ製品の商品力・分別の手間に関する9項目)とした。判別要因探索クロス集計では、各項目の質問に「はい」と回答した割合についてグループ間の差を求め、差の大きい項目をグループ間の判別要因とみなす(菅, 2018)。今回は、差が10%以上の項目を判別要因とみなした。

①G2群とG3群の判別要因 (意識の規定要因)

まず、意識の高さの違いをもたらす要因を探るために、G2群 (意識は高いが行動力が低い) とG3群 (意識が低く行動力も低い) の判別要因を分析した。

大問C群について、G2群の方が大きかった判別要因は、「c6:身近な人のプラごみの話 (教育)」、 「c1:家庭でのごみの分別 (習慣)」、 「c3:ポイ捨てしない習慣 (習慣)」であった。一方、G3群の方が大きかつ

たのは、「c11:人体への影響 (知識)」であった (図6-a)。

大問D群について、G2群の方が大きかった判別要因は、「d8:環境配慮企業のイメージの良さ (イメージ)」、 「d9:環境配慮行動をする人のイメージの良さ (イメージ)」であった。一方、G3群の方が大きかったのは、「d7:プラのデザインの良さ (商品力)」、 「d1:プラごみ分別の面倒さ (分別の手間)」、 「d2:ペットボトル分別の面倒さ (分別の手間)」であった (図6-b)。

②G1群とG2群の判別要因 (行動の規定要因)

次に、行動力の違いをもたらす要因を探るために、G1群 (意識も高く行動力も高い) とG2群 (意識は高いが行動力が低い) の判別要因を分析した。

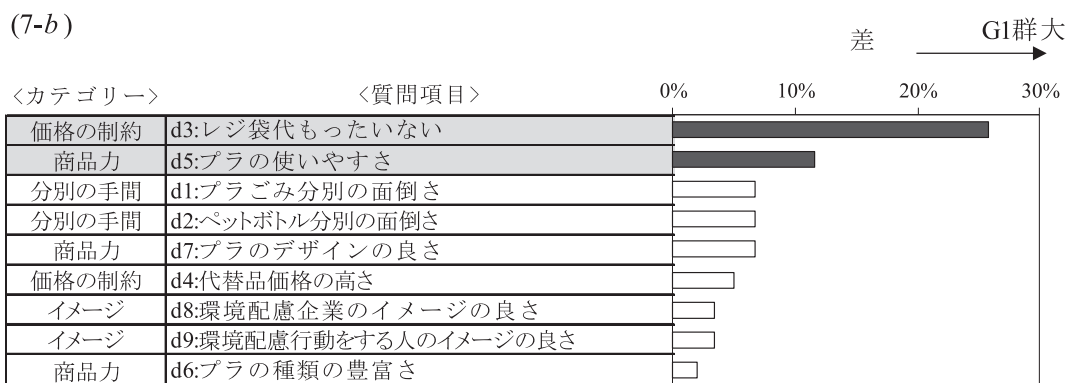
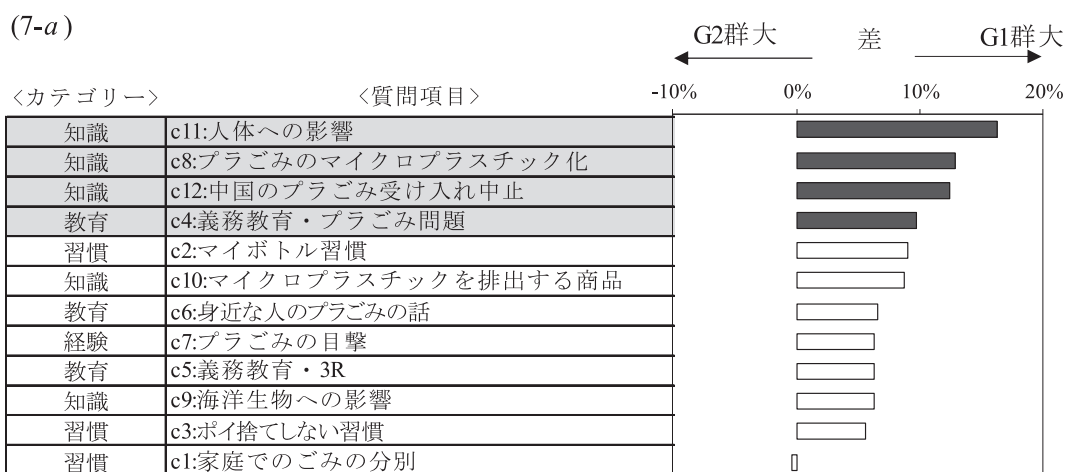


図7 G2群とG3群の判別要因 (7-a : 大問C群, 7-b : 大問D群)  
 注1) グレーの横棒は、グループ間の差が10%以上の項目

大問C群について、G1群の方が大きかった判別要因は、「c11：人体への影響（知識）」、「c8：プラごみのマイクロプラスチック化（知識）」、「c12：中国のプラごみ受け入れ中止（知識）」、「c4：義務教育・プラごみ問題（教育）」であった。一方、G2群の方がG1群に比べ、差が10%以上大きい項目はなかった（図7-a）。

大問D群については、すべての項目で、G1群がG2群より「はい」の比率が高かった。G1群の方が、差が10%以上大きかった判別要因は、「d3：レジ袋代もったいない（価格の制約）」、「d5：プラの使いやすさ（商品力）」であった（図7-b）。

#### 4. 考察

##### (1) プラごみに対する意識と行動の関係

プラごみに対する意識と行動は、カテゴリーで傾向が異なった。まず、リユース、リサイクル、モラルについては、意識・行動ともに高く、リデュース、社会参加、代替品については、意識・行動ともに低い傾向がみられた。リユースやリサイクルはプラスチック製品の使用を前提としているのに対し、リデュースや代替品ではプラスチック製品の自発的な利用抑制が求められる。今回の調査では、ペットボトルやカトラリーなどワンウェイのプラスチック製品に限定した設問であったが、手軽に使用できる環境で、使用しないという選択は、リユースやリサイクルに比べてハードルが



高いことがみてとれる。特に、ペットボトルについては、リサイクルは意識・行動ともに非常に高かったにもかかわらず、ペットボトル飲料を買わない(リデュース)という意識・行動は、いずれも非常に低かった。マイボトルで持ち歩ける飲料が限定的であるのに対し、ペットボトル飲料は、種類も豊富で次々に新商品が登場し、自販機やコンビニで手軽に購入できる。リサイクルはしても、購入しないという選択が低かったのは、内容物や手軽さが優先されていることが考えられる。

プラごみに対する意識と行動の関係については、大問A群-B群14項目中9項目で有意に乖離がみられ、全般に意識より行動が低かった。例外的に、レジ袋不要(a5-b5)とマイバッグ持参(a6-b6)は、意識より行動が有意に高かった。理由として、レジ袋は、ペットボトルやカトラリーと異なり、南あわじ市の多くの店舗で有料化されているためと考えられる。レジ袋有料化で辞退率が向上した事例報告もあり(足立ほか, 2021)、大学生においても、行動の誘導に効果的であることが示された。

プラごみに対する意識と行動の関係は、個々の傾向に相違がみられたものの、全体としては、強い正の相関がみられたことから、意識の向上は行動力の高まりにつながる可能性がある。

## (2) 意識の向上にむけて

本研究では、まず、意識の違いをもたらす要因(G2群とG3群の判別要因)、次に、行動の違いをもたらす要因(G1群とG2群の判別要因)について分析を行った。その結果、両者の要因は大きく異なった。

まず、意識の高いG2群は、義務教育での学びより、子供のころの家庭での分別習慣やモラル、身近な人の影響が、意識の低いG3群より大きく、それらが、意識の高さにつながっていた。また、環境配慮行動をとる企業や個人に対して、良いイメージを有しており、それらのイメージに影響を受けていると推察される。

一方、G3群は、G2群よりもむしろ知識は豊富であり、知識が意識の向上につながっていないことが示唆された。G3群は、プラごみやペットボトルの分別の手間の面倒さが支障となって、知識はあっても現実には自分で手間をかける気はないと考えられる。また、代替品と比べたときのプラスチック製品の良さとして、特にデザイン面を評価していた。

結果をふまえると、意識の向上には、問題についての知識や啓蒙よりも、まず、プラごみやペットボトルの分別を面倒と感じさせない、実践上の工夫が必要と考えられる。特に、ペットボトルを分別する際には、ラベルをはがし、洗浄・乾燥させて、つぶして出す作業がともなう。自販機付近や下宿などに分別用のゴミ箱を設置し、日常的に分別可能な環境をつくることや、ラベルのはがしやすさ、分別を楽しめる仕掛けなどに工夫の余地がある。また、プラスチック製品については、価格や使いやすさより、デザインが重視されていたことから、大学生の嗜好にあったデザイン次第で、代替品への移行意識が高まる可能性がある。そのほか、環境配慮行動を実践するロールモデルの提示や、企業による取り組みのPRといったイメージ戦略も、意識の向上に効果的であると考えられる。

## (3) 環境配慮行動の誘導策

行動の違いをもたらす要因(G1群とG2群の判別要因)は、G2群とG3群の判別要因と大きく異なった。行動力のあるG1群は、意識は高いが行動に至っていないG2群より知識が豊富であり、義務教育での学びも定着していた。つまり、すでにある程度高い意識を有している場合は、問題に関する学びや理解が、行動に至る基盤となっていることが示唆された。

大問D群で、もっとも差が大きかった項目は、レジ袋代を払うのはもったいないという価格の制約であり、レジ袋の有料化が行動の誘導に効果的であることが、本研究においても示された。また、分別の手間の面倒さやプラスチック製品の評価は、差が10%未満の

項目も含めると、行動力のあるG1群の方が、G2群より総じて高かった。つまり、G1群は、プラスチック製品の良さも評価し、分別の手間もそれなりに感じているが、イメージで左右されておらず、知識に裏付けられた問題の認識と、有料化による誘導で、行動に至っていると考えられる。

## 5. 結論

今回の調査より、プラごみに対する大学生の意識と行動には乖離がみられたが、正の相関があることが示された。また、意識の向上と行動への誘導は異なるステップと想定し、意識の高さが異なるグループ間、および行動力が異なるグループ間の判別要因について分析した。その結果、まず、意識向上の支障要因は分別の面倒さであること、意識の高さは幼少期の家庭での

習慣や、身近な人に影響を受けていること、環境配慮行動の良いイメージが意識の向上につながっていることが明らかになった。次に、すでにある程度高い意識を有している場合、行動に至るグループは、プラスチックの良さを評価しつつも、問題に対する知識や理解に基づいて環境配慮行動を実行していた。同時に、レジ袋の有料化は、行動レベルの誘導には有効であることも示唆された。今回の分析で、意識と行動の相関を示せたため、意識の向上と行動の変容の因果関係を明らかにすることが、今後の課題である。

## 謝辞

本研究にご協力いただきました本学部の皆様に御礼申し上げます。

## 引用文献

- 足立千尋・大沼進（2021）「レジ袋有料化に伴うコンビニエンスストアにおけるレジ袋辞退率の変化：札幌市における店頭観察調査」, 廃棄物資源循環学会論文誌32：65-71
- 土井美枝子（2011）「わが国の環境教育における意識と行動に関する既往研究の系譜」, 広島大学マネジメント研究11：99-110
- 磯辺篤彦（2018）「海洋プラスチックごみの発生・移動とその行方」, 廃棄物資源循環学会誌29（4）：270-277
- 内閣府（2019）『環境問題に関する世論調査』概略版
- 大塚佳臣・高田秀重・二瓶泰雄・亀田豊・西川可穂子（2021）「マイクロプラスチック汚染研究の現状と課題」, 水環境学会誌44：35-42
- プラスチック循環利用協会（2022）『2021年プラスチック製品の生産・廃棄・再資源化・処理処分の状況：マテリアルフロー図』
- 菅民郎（2018）『アンケート分析入門：Excelによる集計・評価・分析』, オーム社
- 陳艶艶（2022）「環境意識と行動の関連性の実証分析：2016年東京都民の意識調査に基づいて」, データ分析の理論と応用11（1）：15-36
- 山下麗・田中厚資・高田秀重（2016）「海洋プラスチック汚染：海洋生態系におけるプラスチックの動態と生物への影響」, 日本生態学会誌66（1）：51-68